

大庄屋文書から見た酒田の世相（六）

須藤 良弘

内町組大庄屋・伊東家と米屋町組大庄屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）からである。なお、文中の句読点は筆者が付け加えたものである。

一、町屋敷の売買と本間家屋敷

野附家文書に『貞享三年丙寅二月 亀ヶ崎米屋町家数軒数帳』がある。一六八六年に亀ヶ崎城下米屋町組の各町の屋敷の所有状態を調べ、その後の屋敷所有者の移動状況を記載した土地台帳である。この軒数帳には「元禄十四年巳七月名改」という文字が屋敷の所有者の上に数多く書き込まれているので、一七〇一年七月に水帳改めが行われたものと思われる。

この軒数帳には米屋町組の区域とされているのは、米屋町・八軒町・一ノ口川端・山王堂町・川端・荒瀬町・近江町・鶴田口浜町・筑後町の九町である。

様式は米屋町の場合、「米屋町肝煎庄次郎組 一、家老軒 老軒屋敷 五兵衛 一、同老軒 右同断 庄右衛門（略）
一、家老軒 貳軒屋敷 七右衛門後家 一、家老軒 貳軒屋敷老軒之御役下 彦左衛門（以下略）」。「一軒屋敷とは標準的な屋敷で、間口約四間、奥行三十間前後、約百坪である。彦左衛門の場合は二軒屋敷の内、一軒分が税の対象となる御役下、残りの一軒分は税の対象とならない無役屋敷で、町役人などの役職についていたものと思われる。

屋敷の移動は書き込みや貼り紙で示されている。例えば、「一、家老軒 半軒屋敷 仁兵衛（貼紙）八蔵（貼紙）甚兵衛（脇に）此裏地 幅二間 長四間 元禄九年子九月より先屋敷主八蔵方より買家作罷在候同十四年巳十二月七日 二改 仁右衛門」。

これは米屋町・仁兵衛の約五十坪の半軒屋敷が八蔵に替わり、さらに甚兵衛に替わっている。書き込みによると、この屋敷の裏地の幅二間・長さ四間が元禄九年に屋敷の所有者・八蔵から仁右衛門が買い受け、八坪の土地に家を作り住居とし、同十四年十二月に所有者が正式に仁右衛門になったというものである。裏地の間口二間は半軒屋敷のことである。一軒屋敷の間口を半分にしたもので、酒田に多く、半ざき家といわれている。さらに狭い三分（歩）屋敷や一分屋敷さえも見える。例えば、筑後町で半軒屋敷の内、「元禄十一年寅五月仁兵衛貳分五リン同町助左衛門ニ売申候」などがある。

移動を示す貼り紙は脱落が多く、脈絡がはつきりしないものが多い。米屋町の三例だけ次にあげてみる。

ア、権四郎と九兵衛の二人の名になっている一軒屋敷がある。「貞享五年辰九月権四郎半軒八右衛門ニ売渡シ申候」で、権四郎の名の上に八右衛門の名の貼り紙がある。元禄四年三月に「八右衛門半軒御蔵役人清水小左衛門買、同年七月当町名子与兵衛ニうり申候」とある。町場での名子とは屋敷を所有していない使用人などに使われている例が多い。

与兵衛の半軒屋敷は元禄八年二月に筑後町の六兵衛に「ウリ申候」、同「十年丑ノ九月一日、六兵衛半軒平田郷横代村長左衛門ニ売申候」となり、同十一年二月十一日には長左衛門は米屋町・三太郎に売っている。権四郎の半

軒屋敷が貞享五年から元禄十一年までの十年間で六人の手に移っている。酒田町以外の横代村（現在酒田市内）の者も購入している。

一方、九兵衛の半軒屋敷は「七年戌之十二月九兵衛半軒、酒田秋田町五郎八二売渡申候」、さらに「十年丑ノ九月二十八日五郎八半軒、同町三四郎卜家替申候」と五郎八は三四郎と家を替えている。五郎八のように他町の者が米屋町の家を買い取る例は多く見られる。

イ、助右衛門の一軒屋敷は元禄五年四月に半分の半軒屋敷を稲荷小路・善七に売り、同十二年八月に善七は本米屋町・弥次兵衛に売り、助右衛門の残りの半軒屋敷も同十年六月には給人町・多兵衛に売り渡している。

ウ、庄兵衛の一軒屋敷は元禄五年から同八年までの間に目まぐるしく替わっている。「五年申十一月庄兵衛一軒田村新田徳右衛門二売り申し、同六年酉二月徳右衛門内町次郎右衛門二売り申し、同年極月右次郎右衛門山升小路清右衛門二売申」、「八年亥五月清右衛門一軒本米屋町太郎兵衛二売申」。

米屋町の場合、貞享三年二月の家数が四十四軒、税の基準とされた軒数三十九軒三分が、元禄十四年には家数が四十八軒、軒数は四十三軒五分である。米屋町組全町の家数二百七十三軒が三百七十軒となり、その内、八軒町肝煎重右衛門組は三十九軒が五十九軒に、山王堂町肝煎九右衛門組は二十九軒が三十軒に、近江町肝煎八右衛門組は二十四軒が三十一軒に、鶴田口浜町肝煎七左衛門組は二十六軒が三十六軒である。

筑後町肝煎五右衛門組は七兵衛組、長吉組と名を変え、五十八軒が九十三軒と大幅に増えている。この町は十七世紀初頭亀ヶ崎城が最上家支配時代、川北三奉行の一人・斎藤筑後の宅地があったとされる。その後元和八年（一六二二）頃は少数の民家があったが、風砂のために移転、寛文七年（一六六七）に移転新築された下蔵も同十二年には新井田に移転。延宝六年（一六七八）この地に屋敷割りが命じられ、天和三年（一六八三）から家作が始まったことによるものと思われる。

荒瀬町肝煎角左衛門組は二十五軒が二十一軒と唯一家数が減少している。これは、貞享元年（一六八四）から米屋町組大庄屋・野附七郎左衛門がこの町に居住し、「壹軒半屋敷無役」が与えられた。さらに吉十郎と吉右衛門のそれぞれの半軒屋敷が「無役野附七郎兵衛下屋敷」に、勘七の一軒屋敷の内半軒も同五年に彦七に売られ、これが「元禄元年辰ノ極月、彦七半軒野附七郎兵衛二売、同式年巳ノ正月七郎兵衛居屋敷壹軒半之内二入、無役二成申候」となった。なお、米屋町組のもう一人の大庄屋・池田吉兵衛の「半軒屋敷無役・下屋敷」も荒瀬町にある。

伊東家文書に『享保十六年本町一丁目分御水帳写』の図面がある。酒田町の中心で、豪商の三十六人衆居住の本町でも屋敷の所有は激しく変わっている。北側の一軒だけをみると、「十分 表口四間三尺五寸 裏行三十一間 勘三郎」。それに 貼紙があり、「宝暦三酉年十月勘三郎より買申候 三郎兵衛」、さらにその上に貼紙、「(虫食い) 三郎兵衛より買申候 庄七」。

本町一丁目の北側に十分屋敷が九軒と二十分屋敷が一軒、東端に「三分八リン九毛」屋敷が一軒である。十分屋敷のすべての表口は四間三尺五寸、裏行は三十一間である。

ここでは一丁目北側に位置し、土分に取り立てられた本間光丘（久四郎）が巡見使宿として、明和五年（一七六八）に建立した県指定文化財の本間家旧本邸の屋敷について紹介する。

新に本間家所有となる屋敷地は、享保十六年（一七三一）では十分屋敷に三左衛門。東隣の十分屋敷に清兵衛と、この裏地に与四兵衛。この東隣の二十分屋敷（表口九間四尺・裏行三十七間）には、この内十八分は弥兵衛、二分が勘三郎（裏地で宝暦七年に伊兵衛屋敷であったものを、勘三郎が「ゆすり受申候」した地）。この東隣の三分八厘九毛屋敷は清右衛門である。元文四年（一七三九）三左衛門屋敷を俊安が「買申候」と所有が替わるが、その他は省略する。

合計四十三分余の屋敷は「明和六丑年十月晦日」に、「俊安・清兵衛・弥兵衛・清右衛門・仁兵衛・伊七・平蔵・勘三郎、右八人屋敷御町地、今度御家中地被仰付」られ、「御町奉行金井男四郎殿」や御徒目附・御足輕目附御普請方役人の「御

立合之上、御普請方御引渡相済、本間久四郎殿御拝領」。御町屋敷が御家中屋敷にされ、本間家で藩から拝領した。

ここに住んでいた八人の屋敷が売買されたものか、替地についてなどは記載されていない。また、この文書では拝領が明和六年十月であるが、建物の建立は前年の五年とされており、そのいきさつについても不明である。

この拝領屋敷の向いに（一丁目南側）、本間家の屋敷がある。「拾分 表口四間三尺五寸 裏三十二間三尺 本間久四郎」。西隣は清右衛門の十分屋敷である。宝暦六年（一七五六）三月、清右衛門の内、幅一間・長十六間の一分を本間久四郎が「買申候」、さらに同十二年十一月には幅三間・長十六間の四分を買っている。

二、廻船宿の指定をめぐって

寛政三年（一七九一）、御勘定所より次のような「申達」が出された。「北國筋御廻米可積空船、其湊江差致候得者、廻船宿定有之、其支配ニより及差図、宿為致候之由、相聞候、右何故、支配ニより差宿申付候事ニ候哉」（伊東家文書『御用書記』）。

幕府の廻米を運ぶための空船が酒田湊に入って来、その船員が宿泊する宿が支配によって決められている。続いて、その湊の内であれば、「何連之宿船」に居っても差し支えないし、船方が「勝手を以、宿相對いたし候」ても差し支えない。「以来者、船方勝手次第、可被申付候」。すなわち、船方が宿と値段などを相談の上、船方が自由に宿を決めてもよいというものである。

これに「御城米酒田浦役人」で、船宿でもある小幡甚吉と富樫宗作は驚き、「酒井左衛門尉様御内斎藤金治殿」に次のような「御答」を出している。

「此段、私共先祖、往古より御廻米御世話仕罷在候、百三十年已前寛文年中、当湊御議定之節、浦役人被仰付、御廻米積渡二付」。続けて、幕府米を積み、日和をみて出帆するまで、幕府米以外の「商荷物等積込、不埒之儀」があるかどうか、さらに船乗りの身すべてに「猥之儀」がないように「御取扱い」のため、御廻米船に限り、宿を仰せ付けられ、五人扶持を頂いている。「御廻米船宿」をやり、浦役人も勤めてきたが、何も支障はなかったと答えている。

結局、寛政五年になって富樫と小幡に、「浦役人、古来より御城米舟宿致来候處、不相当之旨、御勘定所より御沙汰在之候二付、已来舟宿致間敷旨、被仰付候」（伊東家文書『御用帳』）と、浦役人が御城米船の船宿を兼ねることが禁止された。御城米船側が浦役人によつて船宿が独占されていることに反発して、御勘定所に訴えたことから発生した問題と思われる。

三、他国者の死

湊町・酒田では他国の船頭などが酒田で死を迎えている例が多くみられる。文化十三年（一八一六）、酒田町奉行山中傳太夫より庄内藩家老松平甚三郎等に、獵師町問屋弥平の「旅人」で、同町旅籠屋文七に止宿している「奥州二本松之小田松文輔」という者が病死し、その者の「所持之品」について先例もないことから、「御差図被成下度」が出された。文輔の死を「御町役人共」が「二本松役人江為掛合」した。弥平が「指立候飛脚」が持ち帰った「返報」によると、文輔は「去暮、彼之方欠落いたし、帳外者」となっているので、処分については酒田側にまかせるというものであった。そこで、「大小ハ御取上ケニ相成」、「残品者弥平文七内之諸費茂相立候」したので、兩人に「下置」かれてもよいのである。それに対して、家老方からは、「文輔所持之大小・衣類・其外之品共不残拂ニ被申付、右代金之内、弥平文七諸費之

入用為取」、さらに「残金銭二而石碑二而茂相立」、なお残りがあつたら、文輔を「葬埋」した大信寺に「祠堂金」として増すようにと申し付けられた(野附家文書『御用書拔書』)。

次に文久元年(一八六一)十月十三日、越後岩船郡新発田上町の彦左衛門が「今朝、爰許今町江倒居候」である。役人が「何頃家出致、廻何所心懸」を「相糺」しても「耳遠」くて、「一向、相分不申」であつたが、前記の「出生之者」であることは間違いないようである。そこで「医療申付、快方迄逗留」するよう申し聞かせたが、本人は「片時も早帰国致度候得共、路用之貯」もなく、「按駄」で送ってくれるよう「只管、相願」った。

往来手形等も所持していないが、「当人願之筋、無余儀、不便之事」である。そこで、役所の許可を得、按駄で送り出すので、「在所迄御継送」してくれるようにと、「羽州庄内酒田湊 大庄屋野附七郎右衛門 年寄上林熊記」の名で、「越後岩船郡新発田上町迄 宿々 御役人中様」に出された。

十三日に送り出されたが、酒田から田川郡に入つてすぐに、「彦左衛門と申者、按駄送二而、村々継立小国江送出二可相成之所、当十三日夜、私支配十里塚村より濱中村江送遣候途中相果」たので、その「出御判證文」の処理について、清水理右衛門から二十日付きで上林・野附に連絡が入った。処理については省略する。

十三日に今町で倒れ、当日送り返し、その夜途中で死亡したが、「彦左衛門と指送り候節、諸入目二御座候間、三町雑用錢之内」より支払われた。酒田町組が一貫二百七十五文、内町組が三百十九文、米屋町組が百六文、合計で錢一貫七百文である(野附家文書『酒田町組御用扣』)。不幸な他国者を不憫であるとして、酒田では人道的な取り扱いをしている例である。

四、出奔者の死

安永八年（一七七九）七月十二日、十一年前に出奔した左之助が乱心状態で鶴岡藩士門前に倒れているので、受け取りに来るようにと命じられた外野町肝煎・傳兵衛の口上書から始まる。

「拙者支配左之助と申者、乱心躰ニ而、鶴岡御家中様御門前ニ倒罷在候ニ付、人元親類とも召連、受取候様被仰付奉畏候」、「右左之助儀、十一年已前丑十二月八日出奔仕、其節御郡中御尋願申上、被仰付候者ニ御座候、尤左之助と申候者、前名ニ御座候而、出奔候節者、五左衛門と申候、」。

肝煎・左之助兄弟が受け取りを仰せ付かったが、「きも煎傳兵衛病氣」、「左之助弟五左衛門兄仁兵衛義ハ病氣」、弟五左衛門とは左之助の前名を襲名したものと思われる。結局、鷹町肝煎の平四郎等が代わりに受け取り、帰った。役所より「左之助受取相帰候ハハ補理へ入置、急度相守候様ニ」、さらに「補理拵ひ出来候迄、腰縄ニ被仰付候、右為入用、御町用金より貳貫文拝借被仰付候」。補理が出来るまでは腰に縄付きである。補理設置は御町用金から拝借。補理は座敷牢か。

「同十八日補理出来候由、平四郎申出」、出役・目明が遣わされ、「無宿左之助補理へ為入候」。左之助の弟・五左衛門への預かりである。

「外之町五左衛門へ御預候無宿左之助、昨夜九ツ時補理を破り」したが、九月十七日「左之助病氣懸り相見」と傳兵衛の申し出があった。「月番医者」の長坂・結城が「療治被仰付候」。二十日、「左之助病死いたし候」、「御足輕目付・御同心より死骸見分、其上五左衛門等一通尋のみ」で口書も取られなかった。二十二日、「左之助死骸親類共へ被下候」

（伊東家文書『御用帳』）。

五、国目付・遊行上人の来酒

幕府の政策により国目付や遊行上人は諸国を廻り、酒田でもその都度、非常な緊張感に包まれた。

明和七年（一七七〇）、「三月十三日御目付江戸御出立」、「御町中江申渡寛」「妻子共二も能々可申付候」が出された。微に入り細にわたるものである。

「御町家々名子共、火之用心入念」、「御町人衣服之儀前々申渡通 木綿之外、着用いたし間敷候、袖江紬絹之類者不苦候」、御目附中御下向二付、妻子とも別而目立不申様可致候」。火の用心が強調され、「家毎二水おけいたし」、衣服は絹が禁止、ただし衣服の袖に紬絹を使うのはよい。

自身番と諸番人の「相増」、さらに「御逗留中、御町表裏昼夜立番、夜二入自身番別而入念可相勤、肝煎・年寄・長人・五人組之者共、無怠、相守可申候」。御目附の通らない町でも掃除をし、「通路之町々」は特に「掃除致、こみ不仕候様、水を打、敷砂いたし」。通路の町々の「二階之分者、簾をまき、戸を立」、御通りの節は「老若二不限、見物二差出」さないように。店の簾もまき、戸障子は明けておく。

何か差し上げる場合は、家主が「無刀二而、袴を着、はき物をぬぎ、庇下江つくはい可罷在候」、「御道筋御町肝煎、羽織袴を着つくはい可罷在候」。御目附の家来から用事を頼まれた時は、「相叶候儀者、何儀二よらず、無滞、相達可申候」、さらに「御家来軽き者二至るまで、無礼無之、相守可申候」である。御通りの節は諸普請は勿論、「かち・風呂屋・綿打等之家業停止」、「かふき・遊興かましき」事も禁止である。

「御目附菅沼藤十郎様・戸田主膳様」は三月二十五日鶴岡着、四月五日より「御廻」、その日は「田川御昼、小国御泊」。鼠関・湯あつみ・三瀬・宮下を経て、八日に「浜中御昼、酒田御泊」、「九日 酒田御逗留、御城内御見分、御料

理」十日から吹浦・由利方面まで行き、十三日飛鳥で御昼し、押切・横山を経て十四日「鶴岡御着」である（伊東家文書『御用帳』）。

「寛文十年戌（一六七〇）ノ八月廿一日、遊行上人秋田より当地に御越、宿坊者安祥寺ニ宿」。『宿坊詰』は酒田三十六人衆年寄役全員の鑑屋・上林・加々屋の三人、秋田街道にある「小湊渡し舟詰」は三十六人衆である長人二人、それに酒田三町組大庄屋である渡辺・栗林・遠山等六人全員と御同心一人である。

「貞享四年卯（一六八七）九月朔日、遊行上人当地浄福寺御一宿、同二日ニ鶴岡へ濱を御通被成候」。荒瀬郷から酒田に入り、「濱中迄御送申候」に使われた「馬百六十三疋、酒田歩行夫百七十九人」。「小湊渡し」、酒田・宮野浦間の「大渡り舟場」、「傳馬町宿」などには大庄屋や同心が詰め、警備に努めた（伊東家文書『米屋町組池田家御用帳書拔』）。

寛政四年（一七九二）、十月十六日遊行上人吹浦より御出、翌十七日より御札被下、廿一日迄御札被下、廿二日鶴ヶ岡江御立、道筋宮野浦御越、濱中御昼」。今回は長期滞在で、御札を配布している。この時は酒田町組大庄屋の栗林と渡辺が「寺社兼役ニ而、懸り被仰付」、「外ニ三人宛、年寄大庄屋格番ニ相詰候」。さらに「書役、酒田町三人、米屋町より加勢相詰四人定勤、小使内町組より加勢」（伊東家文書『御用控』）である。

なお、この年の三十六人衆『御用帳』の「遊行上人御先触控」によると、「遊行上人役者 修領軒」から御朱印付で、傳馬五十疋・人足五十人を「宿々人馬並川渡等無遅滞之様支度」を命じられている。

六、町人の帯刀

寛政二年（一七九〇）、酒田町奉行より次の達が入った。「近年、並御町人共、御郡中往来之節、帯刀いたし候者、有

之趣相聞候、已来御郡中者勿論、他所江罷出候共、帶刀致間敷事」。並の町人が刀を差して郡内を往来していると聞いているが、郡内は勿論、郡外に出る場合も帶刀は禁止である。さらに、「小者召連候節、脇差帶させ」る事も禁止である。これに対して、酒田町組・内町組・米屋町組大庄屋の野附・池田・伊東・栗林・渡部と三十六人衆年寄の鎧屋・上林・加々屋から御町奉行所に次の文書が出された。

「拙者共儀、古来者、帶刀仕、相勤申候由之所、天和二年御国御目附様御下向之節、帶刀不仕相勤候様、被仰付、其後面御城下・郷方・他所勤斗、帶刀仕罷在申候」。大庄屋と三十六人衆は昔から帶刀で勤めていた。天和二年（一六八二）の御国御目附が庄内に来た時に帶刀が禁止され、その後は鶴岡・酒田の両城下や郷、他所へ行く公用の時だけ帶刀している。

さらに続けて、「不意御用ニ付、御城米積船等在之、大浜江罷出候節者、帶刀ニ而相詰候事ニ申傳罷在候」（伊東家文書『寛政貳年 御用帳』）。幕府の米を積む船に何か不意な御用が生じた時は、船が着岸している大浜に、帶刀して詰めるようにと申し伝えられていると答えている。

なお、この年九月、三十六人衆から「三十六人御役儀並長人役兼帶勤方之覚」（『酒田市史 史料篇Ⅰ』）が出されている。長人である三十六人衆の由緒、任務などを書いたもので、この中に「古来者年寄始帶刀仕来候處、先年於江戸表、町人帶刀御停止被仰付候節、御断申上候而、平常ハ帶刀不仕候様承傳候」とある。普段は帶刀しないが、公用の節は別と強調したものと思われる。

七、僧籍剥奪

安永三年午（一七七四）十一月十一日、庄内藩の家老・松平甚三郎、中老・松平舎人等五名の連名での通達があった。「鶴田村長寿寺弟子牧仙と申出家、兼而不法不屈之者二付、遊佐郷宮田村長照寺江住職之節」、「旦中（檀家）と度々及口論候」ほどの「我儘」であつた。そのため「旦中より願出候二付、寺外隠居被仰付」、師匠の寺である長寿寺に居ることになった。ところが、「長寿寺旦中と度々及口論」、さらに「長寿寺之後住」になると言い出した。困つた長寿寺では「無致方」、庄内の曹洞宗を管轄する鶴岡の総隠寺（総穩寺）に届け出た。総隠寺は同年十一月、寺社御奉行所に次のような「口上之覚」を出した。

「鶴田村長寿寺先住弟子牧仙僧、宮田村長照寺住職之節、不屈有之、寺外隠居被仰付」、去年の夏以来、長寿寺に居ることになったが、「又々不屈」があつた。そのため、「法類並懇意之寺院等」が内々で「取捨」えしようとしたが、「牧仙僧無納得、不屈相募」、寺も檀家も取り扱いが出来なくなつた。それで長寿寺より、先代住職の弟子ではあつたが、牧仙の「御片付之儀」が総隠寺に願ひ出されたとしている。

総隠寺では長寿寺、法類の下当村・常恩寺や芹田村・光浄寺などを呼び、牧仙に「急度、加教訓、行脚出国」の「慈悲之取斗」をやろうとした。ところが「法外不屈ニ成ル牧仙僧故、長寿寺並法類共、及教訓兼」る有様であつた。それで、長寿寺の檀家共が御役所へ申し上げた通りに「御慈悲を以、御役所より被御片付被仰付被成下置候様ニ、一統相願候」。総隠寺でも「此上、寺法取斗方無御座候、御苦勞之儀、奉恐入候得共、何分御慈悲之御沙汰、被成下度奉存候」であつた。そのため次の「仰渡書」が出された。「総隠寺より申出候二付、鶴田村従長寿寺、帰俗為申渡、右牧仙兄筑後町宇兵衛と申者江永ク預置候間、急渡押込置候様、宇兵衛江可御申渡候」。さらに「宮田村御百姓之内、牧仙親類並旦方共、

帰俗申渡候間、相詰候様、御郡奉行より為申越候」であつた。牧仙は僧侶の身分を失う「帰俗」となり、酒田筑後町の兄・宇兵衛へ長く預けられ、「押込」にされた。住職として務めた長照寺がある宮田村の親類や檀家も呼ばれ、御郡奉行から申し渡された。

牧仙の帰俗と御預りは十一月十二日に兄の宇兵衛に申し渡され、同日、米屋町大庄屋・野附圓太はさらに「兼而、力量も人二勝レ候出家之事ニ候間、居所随分丈夫ニ志つらひ候様申付」(野附家文書『天明五年 諸御用控』)と報告している。牧仙が人並み以上の力持ちであるので、逃げられないよう御預かりの部屋を特に丈夫にさせたというものである。

長照寺と長寿寺での不法不屈き、檀家との口論について具体的にはわからないが、多くの寺・檀家・兄・大庄屋、さらに藩の郡奉行・寺社奉行・家老等まで巻き込んだ事件であつた。その後の牧仙については記録されていない。